

真宗生活入門講座V

本尊

廣瀬 杲

# 本尊

## 目次

はじめに	1
現代	5
宗教の課題	9
ある経験	14
宗	23
真宗不明	35
聞く・遇う・帰する	47
お仏壇	52

仏壇と塵箱……………

59

本心に尊い事……………

65

南無阿弥陀仏……………

70

名としてはたらく仏さま……………

74

本書は一九七一（昭和四十六）年十月三日、名古屋別院で開催された名古屋大谷クラブ主催の「東別院人生講座」での廣瀬泉先生の講演録である。一九七六年九月には、『本尊』と題して名古屋大谷クラブ出版部から出版された。このたび真宗生活入門講座Ⅴとして発刊することを快諾くださった廣瀬先生はじめ名古屋大谷クラブの皆様にお礼申し上げます。

東本願寺出版部

## はじめに

ただいま、ご紹介をいただきました廣瀬でございます。この人生講座には、たしかこの会館（東別院青少年会館）が建つ以前に、一度か二度お邪魔をした記憶がありますが、こうした立派な会館が建ちましたからは、初めてお話をさせていただくわけでございます。

で、今回は「本尊<sup>ほんぞん</sup>」という講題のもとに、日ごろ考えておりますことをお話ししてみようかと思っております。実は、この「本尊」という講題でお話するのは、ここが初めてではないのでして、数ヵ月前にも同じ題で大阪のある会でお話をさせていただきました。しかし、本尊ということが、私自身の生活の中での大切な課題となつてまいりました

のは、昨年こぞの春はるごろからであります。そんなこともあって、ご縁をいただくたびに「本尊」という題でお話を聞いていただくことが多いわけにあります。

ところが、私の親しい友人が、この「本尊」という講題を見まして、「お前らしくもない、ずいぶん古くさい題を出したもんだなあ」といいました。そんなふうふうに友人から指摘しげきをされますと、題を出しました私自身も、ひよつとするとそうかもしれないなあという気持が、心の中こころにふつと動いたわけであります。私の友人も、特別深く考えて私の題について批評をしたわけではないとは思いますが。しかし、そういわれてみますと、これまでいろんなご縁をいただいてお話をいたしますとき、どちらかと申しますと私の題は、まあよくいえば現代的げんたいてきというんでしょう

か、悪くいえば新しがりやの題と申しますか、そういう題でお話をするはなことが非常に多いわけでございます。友人に指摘されて自分をふり返ってみますと、たとえば「一人の尊嚴そんげん」、あるいは「開かれた信頼の世界」、「人間解放の原点を求めて」というような題を出してみました、そういういろいろな題を出しながら、仏法ぶつぽうというもの、仏教、仏様の教えおんがらというものを私なりに、現代げんたいを生きていく私なりに受けとめてみたいという試みしをしてまいりました。

そういう意味では、これまで、あちらこちらでお話をするはなときの題は、どちらかと申しますと、新しい、いちおう題だけは新しい感覚の題でお話はなしておったわけであります。そういう廣瀬ひろせという人間が、「本尊」という題で話をするはなということは、確かにその友人が直感的に感じたよ

うな古さと申しますか、あるいは私に似合わない題と申しますか、そういう感じがする。ですから、そういう指摘をしたんだろうと思います。そして、その指摘を受けましたとき、ただいま申しましたように、私自身も、ひよっとすると、そうなのかなというような気持がふっと心の中に動いたわけです。

ところが次の瞬間、さて、本尊という題でお話をし、あるいは本尊という題をかかけて仏法について考えるということが、なぜ古くさいというふうな感じで受けとめられなくちゃならないのかなあ、と思いました。それは、その友人だけの問題ではなくて、題を出した私自身も、古くさいのかなという懸念けねんが心の中にはたらいていたということは、やはりなにか、本尊という題で仏教の話をするということの中に、一種の感覚と

して現代人好みでないと申しますか、そういうものが動いていたのではないかと思われます。そうすると、それは、いったい何なんだろうとか、こんなことをです、自分で題を出して友人に指摘されたとき、かえって逆に考えさせられたわけです。本尊という題が古めかしいとすると、いったい宗教というものは、何をもちて決め手とするんだろうかと。それが私には、かえって、友人の指摘を通してあらためて自分自身に問われることになったわけです。

## 現代

現代という時代は、いろいろな問題が多様性をもって人間に迫ってくる時代であります。それは私が申し上げるまでもなく、経済問題にいた

しましても、政治の問題にいたしましても、決して、特定の政治家、あるいは特定の財界人という人たちだけの問題ではなく、経済の問題が、あるいは政治の問題が、私たち一人ひとりの生活の中に食い込んできて、それから目を離しておるわけにいかないというように、さし迫った問題になっている。そういう意味で現代は、かつては特殊な問題であった事柄が、もう否定<sup>いやり</sup>なしに、日常生活の中の問題になっているという時代のようにあります。

数年前でありますけれども、ある公害<sup>はなは</sup>の甚だしい地区、特にそれはカドミウム禍<sup>か</sup>のひどい地区へまいりまして、そこでお話をさせていたいただいたことがございました。そのとき、話の後に座談会がございまして、その座談会で、一人の中年を過ぎたぐらいの方が、こういうふうなことを

いわれたのです。われわれは小さいころから、自分の父親なり母親なり、あるいは、おじいさんなり、おばあさんなりに、お米の一粒の中にも菩薩<sup>ぼさ</sup>様がおられる、だからお米は菩薩様であるといわれてきた。だから、それをこぼしたり粗末にしたりすると、菩薩様を粗末にするといわれて叱られて育てられてきたものであると。ところが今日では、そういう、お米が菩薩様だというような家庭の空気、雰囲気というものがなくなつた時代になってしまったと、そのことを悲しんで発言しておられました。この発言には、かなり多くの人たちが同感しておつたように見受けられました。

ところが、その発言者よりもっと年をとられた方でしたけど、見たところ七十五、六歳と思われるご老人の方が、その人に向かつてこういう